新出の「立山曼荼羅」からみる立山信仰の一考察

細木ひとみ

はじめに

立山連峰のうち、剱岳から浄土山までの山容を背景に、立山開山縁起や立山地獄、関連する名所・旧跡などを大画面に描く宗教絵画「立山曼荼羅」は、立山信仰を研究する上で重要な資料の一つである。立山博物館でも中心的な資料であり、国の重要有形民俗文化財に指定されている「立山信仰用具」1,243点にも、令和２年３月の追加指定により合わせて11点の立山曼荼羅が含まれることになった[1]。

芦峅寺大仙坊の家に生まれ、雄山神社宮司もつとめていた佐伯幸長氏の著書『立山信仰の源流と変遷』[2]の「諸国檀那廻り」には、

> 布教地の町や村に着くと先祖以来の一定の信者宿があり、そこで『立山様』がこられたと布達されて当夜集ってきた人々に四幅対の立山曼荼羅絵を床に掲げて、立山開山縁起と地獄極楽勧善懲悪の法話、それに中宮寺媼堂の女人救済彼岸往生の一条を物語り、立山の尊さと怖しさを語って夏季の立山登山を勧説する。ことに『生きて地獄極楽を此の眼で見、弥陀如来、勢至菩薩、観音菩薩三尊の御来迎を拝み得るは天が下には、わが越中立山あるのみ』と強張する。
>
> そして山麓芦峅寺の秋の彼岸中日の布橋大灌頂の縁起を詳述して『女人の罪障消滅し即身即仏、極楽往生の唯一不二の大事なり』と説く。立山の神札、火の札、牛馬の守札、養蚕の守札、牛王札、雷鳥札その他を全戸に配札する。そして死者に着せる経衣を宿に予托して、翌日次の町村へ出立するのである。

と記す（下線は加筆。以下、同じ）。特に、立山地獄については「仏説の通りの現象は他山の地獄谷にはない。全く立山独特のもの」とし、「これを余すところなく絵に描写し一百三十六地獄を絵解きしてあるのが立山曼荼羅であり、四幅対に画かれた此の図を持参して全国を巡行教化したのが芦峅寺三十八坊の衆徒である」という。そして、

> まさに勧善懲悪の見事な演出絵図である。芦峅寺の衆徒は此の絵図を掲げ、いとも怖ろしげに哀調悲しく物語る。ともされた、ろうそくの光に写し出された地獄絵に、見る人、聞く人、ふるい上がり、こわさ見たさに称名念仏の声は万場暗夜の中に満ちたという。全国の人々は聞き伝え、語り伝えて立山に地獄あり、生きながらに是を見得ると喧伝されたのも故あるべく、当時の人々の心に与えた影響は量りしれないものがあったであろう。

というのである[3]。立山を見たこともなく、立山への登拝経験もない遠隔地の人々にとっては、自身の居所において立山の世界観を見聞できるものが「立山曼荼羅」であり、立山衆徒にとっては大勢の人を一度に勧化することのできる布教道具であった。

平成３年11月の立山博物館開館時に行われた開館記念展「立山のこころとカタチ―立山曼荼羅の世界―」展示解説書[4]では、立山曼荼羅34点が紹介されている。その際には、先学者の研究業績より立山曼荼羅の画題として、（１）立山開山縁起、（２）立山地獄、（３）立山浄土、（４）立山禅定案内、（５）芦峅寺布橋大灌頂の５つのテーマが挙げられており、大きく分類すると「布橋大灌頂を描く芦峅寺系統に属するもの」、「布橋大灌頂を描かない岩峅寺系統に属するもの」、「その他（両系統に属さないもの）」[5]の３つに分類されるとした。

その後20年経ち、新たな立山曼荼羅も発見され、平成23年６月時点で確認されていた49点のうち１点を除き、まとめて紹介したのが立山博物館開館20周年記念で開催された特別企画展「綜覧　立山曼荼羅」展とその展示解説書[6]である。

さらに、その後の10年間で、木版立山登山案内図（以下、山絵図）を拡大して制作されたもの１点（立山博物館Ｅ本・当館蔵）と立山曼荼羅の一部であるもの２点（大仙坊Ｄ本・大仙坊蔵、福江家本・個人蔵）が発見され、これらを含めた立山曼荼羅をまとめて紹介するために令和３年の立山博物館開館30周年記念で刊行したのが、52点を紹介した『新　綜覧　立山曼荼羅』(7)である。

しかし嬉しいことに、令和５年、「新たな立山曼荼羅」として２点の情報を得た。そこで、本稿では今年度新たに確認した２点の立山曼荼羅について紹介するとともに、これらの立山曼荼羅の持つ特徴などについても検討したいと思う。

１．令和５年度に購入した「立山曼荼羅」

令和５年２月、京都市東山区にある古美術商の目録に「立山曼荼羅」が出品されているという情報があった。紙本著色の軸装一幅で、本紙は縦134.8cm、横62.4cmである（写真１）。京都市内の骨董市で買い付けたため、来歴などは不明とのことであったが、軸裏の天地部分に「越中立山三所禅定」の墨書あり、本紙の左中央部分にも「越中國立山三所禅定」とある（写真２）。制作年や制作者名などは記されていないが、立山での禅定登拝と密接に関わるものと明確にわかる資料である。

ところで、本件資料にある「立山三所禅定」についてだが、岩峅寺延命院に伝来する、嘉永７年（1854）に玄清が記した『立山手引草』(8)には「三禅定と申すは、五山九峯の頂上を行道修行するなり」と記されている。また、佐伯幸長氏の『立山信仰の源流と変遷』(9)にも「立山には古来、三山廻峰と大廻峰がある」とし、

> 三山廻峰というのは、先づ室堂から浄土山に上り雄山に詣で、大汝山真砂嶽を経て別山にて剱嶽を遙拝して今の剱御前より室堂へ帰るのであるが…（中略）

というのであるから、「立山三所禅定」の「三所」とは浄土山、雄山（大汝山・富士の折立）、別山のことだと考えられる(10)。

そして、剱岳から浄土山の山容が実景に近い様子で描かれ、岩峅寺（立山寺）境内を詳細に描いていることや、岩峅寺衆徒が発行した木版立山登山案内図（＝山絵図）に見られる文言が記されていることなどから、本件資料は山絵図の構図を原図にして制作した作品と考えられる。52点の「立山曼荼羅」のうち、中嶋家本（一幅・個人蔵）、志鷹家本（一幅・個人蔵）、立山博物館Ｂ本（二幅・当館蔵）、立山博物館Ｃ本（一幅・当館蔵）、立山博物館Ｅ本（一幅・当館蔵）、立山博物館Ｇ本（一幅・当館蔵）、飯野家本（一幅・個人蔵）の７点も、岩峅寺衆徒が発行した山絵図の構図を原図にして描かれたものとみられている(11)。その中でも、本件資料の全体的な構図は、特に中嶋家本と立山博物館Ｅ本、立山博物館Ｇ本と類似している。

立山曼荼羅の定義に沿って図柄を見ていくと、「立山開山縁起」において重要な開山者・佐伯有頼と矢疵の熊（阿弥陀如来）は描かれていない。唯一、立山開山縁起と関わるものとして、「玉殿岩家」（玉殿窟）に仏の出現を示す蓮台が「連花岩」として描かれていることが挙げられる（写真３）。この点は、中嶋家本と志鷹家本、立山博物館Ｅ本、立山博物館Ｇ本、立山博物館Ｃ本、飯野家本なども同様である。

立山地獄においては、獄卒や亡者はいないものの、立山山中の地獄谷と思われる位置に火焔と血の池地獄を描く。特に「ちの池じごく」の描写は、血の池の周りに卒塔婆が隙間なく立てられている様子が詳細に描かれており、他の立山曼荼羅や山絵図にはない描かれ方が特徴的である（写真４）。確かに、『立山信仰の源流と変遷』には、血の池に堕ちて苦しむ女性たちを救うために、

> 毎年７月盆の15日に芦峅寺一山寺坊総衆にて、大施餓鬼法要を勤修し、血盆経一千巻の供養を執行し、日本全国より篤志奉願の女人の氏名を血脈真言に記載し、その女人の菩提の為と一つ一つに読誦廻向し、それを血の池地獄に深く深く沈めるのである。そうすれば此の功徳によって血の罪障一切消滅して、男子の身と同様に転変し、如意観世菩薩となって極楽浄土に仏となって往生することができるとされたのである。

とあり[12]、立山山中の血の池で毎年７月15日に大施餓鬼法要を勤修していたようで、その様子を描く立山曼荼羅もある。しかし、実際は立山山中の血の池で行っていたのは岩峅寺衆徒であったが、血の池に卒塔婆を描いているものは、「芦峅寺系の立山曼荼羅」といわれる、泉蔵坊本（円隆寺蔵）、吉祥坊本（当館蔵）、立山町本（立山町蔵）、坪井家Ｂ本（個人蔵）、立山博物館Ｆ本（当館蔵）であり、それも本件資料のような、池を囲むように卒塔婆が立てられた様子ではない。

さらに、立山浄土を象徴する図柄として、阿弥陀如来の来迎図がある。山絵図では、阿弥陀三尊の来迎の場面が雄山と浄土山の間に描かれることが多いが、本件資料では蓮華座の上の光背に「三圖 / 御来迎 / 彌陀」と書かれた形で表されている（写真５）。52点の立山曼荼羅にも同じような描き方をしているものはない。しかも、阿弥陀如来の来迎図を描かない立山曼荼羅は、一部しか残っていないものやある事柄だけを描いたものを除くと、称念寺Ｂ本（称念寺蔵）、玉泉坊本（個人蔵）、日光坊Ｂ本（個人蔵）、四方神社本（四方神社蔵）しかないのである。

この中で、称念寺Ｂ本は、立山ゆかりの称念寺に伝来し、軸裏に「立山圖繪」や「文化十年二月中旬」（文化10年＝1813）などの墨書がある作品で、立山の地獄谷の様子を赤色で表現しているものの、他の立山曼荼羅に比べて図柄がないのが特徴である。そのため、「立山曼荼羅」の定義でいう、「立山信仰布教のための用具」とは異なる役割を持った作品と考えられることから、来迎図が描かれていないようにも思える。また、玉泉坊本（個人蔵）、日光坊Ｂ本（個人蔵）、四方神社本（四方神社蔵）については、明治期以降に制作された立山曼荼羅であるため、神仏分離の影響が考えられる。明治期以降に制作されたとみられる坂木家本（個人蔵）は、来迎図らしきものを描いているが、阿弥陀三尊の姿は黒く塗りつぶされて影のような姿で表現されている。これらを踏まえると、本件資料も明治期以降に制作されて神仏分離の影響を受けたために阿弥陀三尊の来迎の姿を描かなかったという可能性が考えられる。しかし、光背や蓮華座が丁寧に描かれていることをみると、制作者の画力が足りず、阿弥陀三尊の姿を描けなかったという可能性も捨てきれない。

本件資料については、今後の研究課題があるものの[13]、岩峅寺系の山絵図の構図を基に制作されたと考えられる立山曼荼羅と同様に「立山信仰の世界を描く絵画」であるとの位置付けから、富山県が購入し、立山曼荼羅の一つとして「立山博物館Ｈ本」と名付けた[14]。そのため、令和５年６月現在で、確認できる立山曼荼羅は53点となったのである。

２．立山博物館Ｈ本と類似する立山曼荼羅

先に紹介したように、立山博物館Ｈ本に特に類似する立山曼荼羅が３点ある。

中嶋家本は、紙本著色の一幅で、上部に内題として「越中國立山岩峅寺圖繪」とある（写真６）。また、「文化三寅年十月四日 / 北條左近平氏富書寫」とも記されているため、岩峅寺図絵として北條左近平氏富によって文化３年（1806）に書写されたとわかる。しかし、個人が収集したものであるため、その来歴は不明である。立山博物館Ｅ本は、平成25年に個人より購入したもので、やはり詳しい来歴は不明である。内題に「越中國立山禅定名所附圖別當岩峅寺」とあり、まさに岩峅寺衆徒発行の山絵図「越中国立山禅定名所附図別當岩峅寺」を拡大したようなものである（写真７・８）。両作品とも、岩峅寺系の山絵図の特徴の一つである縁起文のほか、山名や岩峅寺からの禅定登拝道の名所名なども記されている。

立山博物館Ｇ本は、新潟県糸魚川市水保の個人宅に伝わっていたものではあるが、どのようにして入手したのかはわからないという。先の２点とは違い、霞の中に縁起文などはないが、軸裏に「立山畧圖」と墨書されていることから考えて、岩峅寺系の山絵図を模写し、加筆・彩色を施して制作されたとみられる（写真９）。

そこで次に、岩峅寺系の山絵図を基に制作され、立山博物館Ｈ本と類似する中嶋家本と立山博物館Ｅ本、立山博物館Ｇ本とを比較することで、立山博物館Ｈ本の特徴についてさらに考えていきたい。

（1）岩峅寺系の山絵図に記される縁起文との比較

立山博物館Ｈ本には、岩峅寺系の山絵図でみられるような文言が５箇所にある（「/」は改行を表す）。

１つは、「越中國立山三所禅定」に続き、

六月朔ヨリ八月朔迄参詣有之候 / 別當岩峅坊かくばんに / なつハ見ねすみ諸 / 参詣之人を道引 / 冬春ハ前堂にて / 荘厳法會をつと / むるなり

（六月朔より八月朔まで参詣これ有り候。別當岩峅坊各番に夏は峰［に］住み、諸参詣の人を道引き、冬春は前堂にて荘厳法会をつとむるなり）

とある（写真２）。これは、中嶋家本と立山博物館Ｅ本にも「別當岩峅の坊数二十四、各番に夏は峰に住し、諸参詣の人を道引、冬春は岩峅寺前立にて荘厳法会をつとむるなり」とあるので、ほぼ内容は一致している。

他の４箇所の文言は立山への禅定登拝道の名所に関するもので、中嶋家本や立山博物館Ｅ本に書かれる文言は岩峅寺系の山絵図に書かれている内容とほぼ同様である。

立山博物館Ｈ本の場合は、まず、「びじよう杉」の下に

若狭国八百姫のでし / 有若左衛門宇バなり我 / この山ゑのぼらんて / 二人の弟子をつれ / 参詣にをむくに材木 / つみし所ふむにこれ / 石トなり二人でしいき / なからかむろ杉びじよ / すきとなり小便するに / つちけかれそこ / なしとなり

（若狭国八百姫の弟子、有若左衛門ウバなり。我、この山へのぼらんて、二人の弟子を連れ、参詣に赴くに材木積みし所踏むにこれ石となり、二人［の］弟子生きながらかむろ杉・美女杉となり、小便するに土穢れ、底なしとなり）

とあり（写真10）、「鷹ヶ岩家」（「鷲」のつもりで「鷹」と書いたとみられる）の左横に「この下の山我気 / ガ首トいう山これ / 見るたひにかわるなり（この下の山、我気ガ首という山、これ見るたびに変わるなり）」（写真11）と記されている。中嶋家本から関係するところを挙げると、

千手堂ヨリ美女杉迄一里、此間ニ熊雄権現ノ堂アリ。ムカシ材木拵ル所へ女人来ル故、材木石ニ成。立積横ツミ、則材木坂ト成。ガキガ首ト云所有。熊雄鎮坐也。鷲ガ岩屋。若狭国長良ガ尼ノ下女、美女杉ト成。此所ハ水ナシ。ブナ坂迄一里、此間ニ右ノ尼、禿ヲシカリナガラ小便スルニナラク迄穴通シ、シカリバリト云。タンサイノミ坂ト云坂アリ。フダンクワウ仏鎮坐、長良ガ尼召ツレシ禿杉ト成。廻り八尺斗リ、三間ヨリ上へ枝四方へ乱レシンナシ、廻リ三十間余リ有。

とある（下線は加筆）。立山博物館Ｈ本では文言の多くが略されていることから、立山博物館Ｈ本の制作者が自身の興味がある伝説、名所などを端的に記したものと考えられる。

同様に、立山博物館Ｈ本の「中室堂」と「小天狗山」の間あたりに、

此所ちくしよ / の原トいう所有 / 面ハ人間にて / 手足丑馬の / かたちの者す / む所なりこれ / より奥ハ大天 / 狗に天狗の / 御山有なり

（この所、畜生の原という所有り。面は人間にて、手足牛馬の形の者住む所なり。これより、奥は大天狗に天狗の御山有るなり）

とあり（写真12）、さらに「鏡石」の右横に、

此所ニ鏡石宇ば石有この所を彌陀ヶ / 原トいう立横三り有之奥に弘法大師 / 行場猪の岩屋多聞天に参詣之間ニ / 大久さり小久さり有これ三條小かじ / 宗近の作なり并ニ十六善神御堂 / あり中室堂迄に御本社行場の立石有之

（此所に鏡石・うば石有り。この所を弥陀ヶ原という。立［縦］横三リこれ有り。奥に弘法大師行場、猪［獅子］の岩屋、多聞天に参詣の間に大クサリ・小クサリ有り。これ三条小鍛冶宗近の作なり。並に十六善神御堂あり。中室堂迄に御本社行場の立石これ有り）

と記されている（写真13）。これに対して中嶋家本では、

アミダガ原、薬師如来ノ左リハ一ノ谷道登リニ此ミチヲ行ク、下向ニハ姥ガフトコロノ下ルナリ。上野

迄一里、此間ニ二ノ谷小クサリ、一ノ谷大クサリ有リ。三条小カヂ宗近作作、獅子ガ鼻岩屋ニ弘法大師護摩修行ノ炭アリ。サゝ峠坂ノ左リ方畜生原、ソノ所ニ不測ギノ牛馬ミル事多シ、面ハ人間ニシテ四足アリ。下市場迄一里、此間ニ鏡石アリ。右尼姥ガフトコロニテ権現ヘ鏡ヲ上ルニ石ト成。二間四方有。小松坂下市場上市場アリ。聖灵市ヲナス故市場ト云。左リノ方ハ大日ガ嶽、右ハ国見ガダケ、室堂迄一里、此間ニ横ワタリト云所、雪ノ上五丁斗リ行、右ニ出シノ谷ト云ガンゼキノ谷有リ。不信心ノ者ハ畜生出通リガタシ。地獄ノ追分、地獄堂、右ノ方ハ室堂道、左リハ地獄道、高トウバト云所卒塔婆アリ。右ノ方ノ山ハ大天狗小天狗ノ御在所ナリ。

と記されており（下線は加筆）、やはり、立山博物館Ｈ本の制作者が興味を持った名所について紹介しているように思える。ただし、文言だけでなく、名所の名称なども表記が違い、山絵図をそのまま書き写したものではないようである。そして、名所の描写の中でも、特にそれを感じさせるのが「びじよう杉」（美女杉）の描き方である。通常、美女杉を描く場合、立山曼荼羅でも山絵図でも背の高い杉で表現するが、立山博物館Ｈ本では折れており、さらに新しい芽が出た様子で描写されている（写真14）。このように描くということは、実際に目にした美女杉を見て描いたからと考えられ[15]、先述した「ちの池じごく」の描写も同様に、制作者本人が立山禅定登拝に来て、直接見聞きしたものを絵と文字にしたように思えるのである。

それに対して、文言には「十六善神御堂 / あり中室堂迄に御本社行場の立石有之」と記され、描写もされているが（写真15）、実際の立山には「十六善神御堂」も「中室堂」もなく、立山曼荼羅や山絵図にも描かれた様子は確認できない。制作者がなぜこのような堂を描いたのかは現状では判然としないが、大変気になる所である。

（２）立山寺・中宮寺境内の諸堂舎の名称

類似する立山曼荼羅や岩峅寺系の山絵図と大きく異なるのが、岩峅寺集落の立山寺や芦峅寺集落の中宮寺境内にある諸堂舎の描き方とその名称である。

岩峅寺の立山寺境内と思われる位置に描かれている堂舎には、「立山前堂」「三重□（塔ヵ）」「加茂大明神」「稲荷大明神」「住吉大明神」「鹿嶋大明神」「春日大明神」「粟嶋大明神」「神前立山別當」「若宮神社」「岩涛（ヵ）神社」「不動明王」と名称が書かれている（写真16）。これに対して、山絵図などでは「神前立山 / 別當岩峅寺」を中心に、「ミカリヤ」（御仮屋）「講堂」「拝殿」「しゆ楼堂」（鐘楼堂）」「神明」「天神」「八幡」「若宮」「岩崎」「しん宮」などと記される。

見比べると、立山博物館Ｈ本の「立山前堂」「神前立山別當」は、山絵図の「神前立山 / 別當岩峅寺」に対応しているように思える。そして、「三重塔」も、山絵図などでは名称としては重要視されていないが、立山寺境内の御仮屋の横に描かれている。そうすると、他の立山曼荼羅には見られない名称ではあるものの、山絵図に記されている名称を全て排除した訳ではないようである。

芦峅寺の中宮寺境内は、「帝釋天」「諏訪大明神」「高頼神社」「白山姫神社」「不動明王」「気比大明神」「稲荷大明神」「秋葉大権現」「金比羅大権現」「南宮神社」「天満宮」「奥清田宮」「正妙橋」「虚空蔵」「磨利子天」（写真17）と記されているが、中嶋家本では「鎮守」「有頼ノ堂」「帝尺」「姥堂」とあり、立山博物館Ｅ本では「ありより堂」「ちんじゅ堂」「たいしゃく堂」、立山博物館Ｇ本では「ちんしゆ堂」「有頼の堂」「たいしゃく」「姥堂」「じやなぎ」と記されている。通常、描かれる「有頼堂」や「鎮守堂」、「姥堂」が無く、「帝釈天」を他の堂舎よりも一回りほど大きく描いていることは特徴的である。

芦峅寺にあった帝釈堂は、慈興上人の建立とも伝わっており、『法華験記』に「越中立山、彼山有地獄原、此有大峰、名帝釈岳、是天帝釈冥官集会、勘定衆生善悪所也」とあることから、この帝釈山信仰を山麓の中宮寺内に於て廻向礼拝するのがこの堂だという[16]。そうすると、立山博物館Ｈ本において、帝釈堂が大きく描かれるのは、制作者が帝釈天への信仰心が篤かったために特に強調したとも考えられる。

しかし、媼堂においては、像底に「永和元年」（1375）の墨書銘がある木造媼尊像[17]が現存しており、文

正元年（1466）の「神保長誠寄進状」[18]にも「祖母堂」として記されており、芦峅寺衆徒にとっては中世から中心的な信仰対象であったが、その位置に描かれるのは「磨利子天」（摩利支天）である。岩峅寺系の山絵図では、「姥堂」を描かないもの[19]もあるといえども、『和漢三才図会』巻68[20]には「芦峅寺　一里、有坊、有姥堂　大寶三年卯四月十二日慈興上人老母卒于江州志賀、慈興自作母像、慶雲元年八月彼岸中日為葬禮法式、于今然。」とあり、芦峅寺の姥堂に祀られる像が大宝３年（703）４月12日に江州志賀（滋賀県大津市など）で亡くなった慈興上人の母親の像であると紹介されている。その他にも、立山を訪れた人々の、多くの参詣記（道中記）にも「慈興上人の母親の像」と紹介されていることを考えると、名称を書き間違えるとは考えにくいのである。

以上、立山博物館Ｈ本と類似する中嶋家本、立山博物館Ｅ本、立山博物館Ｇ本とを比較しながら、立山博物館Ｈ本の特徴について見てきた。これらのことから考えると、立山博物館Ｈ本には、他の立山曼荼羅には描かれていない「十六善神御堂」や「中室堂」を描くなど、他とは異なる特徴（図柄表現や名称表記）が多数ある。また、芦峅寺の宿坊を「二十四ヶ寺」、千手堂を「千重堂」、獅子が鼻岩屋を「猪々岩屋」などと誤記したとみられる箇所もいくつかみられ、これらのことから本件資料の制作に全く芦峅寺や岩峅寺の宿坊家が関わっていないと言える。また、立山の信徒が信仰心から山絵図などを模写して制作したものであることを考えると、信仰拠点村落の岩峅寺や芦峅寺集落の堂舎を正確に記さないということは、制作者に何かしらの意図があったはずである。そして、それぞれの堂舎に、有名な神社の祭神などが記されているというのも、制作者の信仰対象などが反映されていると考えられる。

それにしても、山絵図の構図を参考に制作された立山曼荼羅は、立山衆徒、特に芦峅寺衆徒が立山信仰の布教に使用したとする「立山曼荼羅」（主に四幅一対のもの）とは明らかに性格が異なるものである。しかし、その制作目的については未だ判然としていない。それでも、志鷹家本は軸裏の墨書から天保期に京都の小松谷御坊正林寺の什物であったことがわかり、立山博物館Ｅ本にも元治２年（1865）に摂津国嶋下郡坪井村（現：大阪府摂津市）の村田廣秀が書写したという墨書がある。また、立山博物館Ｃ本は京都市内の古書店より購入したもので、中嶋家本は滋賀県東近江市の中嶋氏が古美術商より購入したものであることから、岩峅寺系の山絵図の構図を基にした６点中４点が本件資料と同様に京都やその周辺で発見されているというのは興味深い点である。岩峅寺系の山絵図を模写したと考えられる立山曼荼羅の制作において、関西との関わりがあるようにも思えるため、今後、立山博物館Ｈ本の制作について考える上で手がかりの一つとしたい。

３．新たな「立山曼荼羅」の発見

もう１点紹介したいのが、新たに情報提供をいただいた立山曼荼羅である。

令和５年７月、立山を取りあげた番組で紹介されていた立山曼荼羅をご覧になった方より「自身が購入して持っている掛け軸も立山曼荼羅ではないか」という連絡が入った。個人が所蔵するこの掛軸は、ネットオークションで購入されたものあるため来歴などの詳細は不明であり、制作年や制作者も記されていない。ただし、出品された際の商品説明には、「富山県で三代に渡り続く歯科を営む旧家から出品され、先々代・先代が集めた作品」と紹介されている[21]。形態は絹本著色の三幅対で、本紙の大きさは縦141.6cm、横201.9cmである[22]（写真18）。剱岳から浄土山の山容を背景に中央幅と右幅の下部分に大きく布橋灌頂会が描かれていることから、芦峅寺の宿坊家と関わる「立山曼荼羅」の一つであると言える（本稿では、便宜上、「新出資料本」と表記する）。

向かって左幅には、通常の立山曼荼羅では剱岳を一番左端に描くが、本件の新出資料本では剱岳の左側も描いている。さらに、左幅のほとんどを地獄絵で占めており、他の立山曼荼羅と比べて責め苦の種類も多い。例えば、八大地獄の一つである黒縄地獄は「二本の鉄柱に鉄の縄が張られ、石を背負って渡らせられる」と

いう責め苦で描かれることがあるが、現存している53点の立山曼荼羅の中では、立山黒部貫光株式会社本（立山黒部貫光株式会社蔵）と最勝寺本（最勝寺蔵）にしか見られない。しかし、新出資料本にも描かれている（写真19）。

また、鍛冶屋などで燃料を高温で燃焼させようと空気を送るのに使う道具「鞴（ふいご）」が描かれていたり（写真20）、甕の中が青く、藍甕らしきものが描かれていたりしている（写真21）。青木純二著『山の傳説』[23]に、

> 鍛冶屋地獄といふのはその洞を上空に向けて、ヴルカンの鞴もかくぞとばかり、獅子吼してゐる。また紺屋の地獄といつて川の淵に硫酸銅色の怪奇な渦巻を毒々しく煮返ししてゐる。

とあり（一部、ふりがなを加筆）、鍛冶屋地獄はヴルカンの鞴をかくほどの勢いで、紺屋地獄は硫酸銅のような青い色をして渦巻が煮返しているというのであるので、これらの図柄は鍛冶屋地獄や紺屋地獄を想像させる。釜で人のようなものを煮込んでいるように見える地獄（写真22）も、同書に「釜のやうな泥土の壁の中にぐつぐつと餡こを煮てゐるのが団子屋地獄といふのだらうか、百姓地獄といふのだろうか。」とあるので、団子屋地獄または百姓地獄だと思える。

さらに、「みくりが池」は通常、寒地獄とされているが、新出資料本の中央幅に描かれている「みくりが池」には人をくわえた龍がいる（写真23）。これは室堂に住んでいた延命坊と越前の山伏・小山坊のみくりが池にまつわる伝説をもとに描いたとみられる。例えば、先述した『山の傳説』によると（一部ふりがなと下線を加筆）、

> 元和六年四月のこと、まだ、池のまわりには雪が深かつた。
> 池のほとりの室堂に延命坊といふ僧がこもつて居た。
> ある日、越前の山伏小山坊が山に登つて来たので附近を案内した。
> 『この池は夏でも水は氷のやうに冷たいのです、底も深い、物凄い池です。』
> 延命坊が説明すると小山坊は苦笑した。
> 『こんな池がなにが凄いです。』
> 『それ程に仰るあなたでもまさかこの池に飛び込むことはできないでせう。』
> 延命坊もしやくにさわつたので皮肉つた。
> 『わけのない事、こんな小さな池に飛び込む位ひ。』
> 負けぬ気の小山坊は直ぐに真裸となつた。そして口に剣をくわへて池の中に飛び込んだ。紫色の池の面に白波が立つた。
> 小山坊は池の中を泳いだ。一周、二周、三周した。
> 『美事でござる。しかし、御坊は口に剣をくわへておられる。魔を怖れるためでござらう。』
> 延命坊は云つた。
> 『剣―よろしい、それでは今度は剣をくわへずに泳いでごらんに入れやう。』
> 小山坊は剣を預けて池の中に再び飛び込んでゆつた、抜き手を切つて更に三周した時、彼の身體は池の底に引つ張り込まれるやうに沈んでゆつた。
> 延命院も驚いた、あわてゝ仏に念じた、すると小山坊の姿が水面に浮び出た、その時はもう断末魔の死相が現はれ力なくまた沈んでゆつたきり、もう二度と姿を見せなかつた。
> 池の面はもとの静寂にかへつた。
> 『悪い事をした。』
> 延命坊は悔ひた、そして、小山法師の菩提を吊ふために下山し、四月十日深い穴を求めて入り、暗い穴の中で三年間鉦をたゝいてやまなかつた。同じ四月十日になると鉦の音は止んだ。延命坊は落命したのである。
> 池には大蛇が住んで、小山坊を底に引ずり込んだといわれ、風もない時に常に小波がたつのは大蛇が水

中で呼吸して居るのだとも伝られて居る。

というものである。そのためか、みくりが池の傍には、脱いだとみられる服や剣、延命坊らしき僧侶と見物人も描かれている。ただし、嘉永７年の『立山手引草』にはみくりが池に龍や大蛇が住んでいるとは記されていないことから[24]、「みくりが池に住む龍・大蛇」というのは後年になってからの伝説と考えられる。

他にも、火を吹きながら桶で何かを洗っているような地獄（写真24）や、雷に打たれているような男性（写真25）など、他の立山曼荼羅では描かれていない地獄が多数あるのである。

さらに、右幅の餓鬼の田んぼ（弥陀ヶ原）らしき位置に、帽子（もうす）とよばれる白いスカーフを首に巻き、衲衣の上に袈裟を身につける姿があり、「親鸞」とみられる人物が描かれている（写真26）。かつて、親鸞の忌日に信者たちが立山へ登山するという風習があり、江戸末期から明治初期にかけて富山藩に岡崎乙彦という国学者がおり、明治２年（1869）に刊行した『曽理乃綱手』には、

己が登山せしは六月二十八日なりし。凡六百人余り室堂に宿す。おびただしき参詣ゆへ僧に日に日にかくやと尋ねしかば、さにあらず、毎年二十八日は在家のものども打起りて登山す。その故は二十八日親鸞入寂の日なればなり。親鸞は弥陀とかいひて如何となん、当山親鸞開きし山ならねど、そはともかく、我々は散銭の多きをよろこぶと猶笑にたえり。

と記されている。「越中の真宗門徒たちが、毎年六月（旧暦）二十八日に立山に登ったのは、弥陀の化身である親鸞が立山に静まり居るから拝みたいとの信仰であった」[25]とあるので、立山曼荼羅に描かれる理由も理解できるが、親鸞らしき人物を描くのは筒井家本と本件の新出資料本のみである。

その他にも特徴的な図柄がいくつもあるが、全体的に構図を見ると、三幅対ということも併せて立山黒部貫光株式会社本に類似している。そこで次に、両本を詳細に比較し、検討していきたいと思う。

４．立山黒部貫光株式会社本との類似点

立山黒部貫光株式会社本は、絹本著色の三幅対で、大きさは本紙縦143.5cm、横172.5cmになる[26]（写真27）。当館が行ったデジタル近赤外線撮影による調査では、右幅と中央幅に後から加筆や描き直したとみられる箇所が確認されている[27]。出自がはっきりわからず、所蔵する立山黒部貫光株式会社も立山開発鉄道株式会社時に購入したものである。富山地方鉄道の立山駅にあった佐伯宗義記念室に一時展示されていたことから、佐伯宗義本や佐伯家Ｂ本[28]、佐伯記念館本[29]などとも呼ばれていた。

長島勝正著『立山曼荼羅集成』（第二期）の付録の解説には、佐伯記念館本の説明として「この図幅はもと宇奈月町河内美術館に蔵していたもので、京都の信者が寄進した由の裏書があったが、改装のときに失われた。岩峅寺の社寺や布施の犬山の佐伯氏の館は描かれていない。布橋大灌頂が大きく描かれているが、芦峅の社殿は見えない。弘法あたりに一列に十二軀の石仏がある。藤橋では親子の猿が架橋を手伝い道元禅師の渡橋を助ける。玉殿窟は阿弥陀・不動明王の立像が描かれ、浄土山の来迎図は阿弥陀三尊が先に、残りの二十五菩薩がややおくれて一団になっておりてくる。剣岳のわきに三重塔がたち、塔の九輪のさきに大日如来が出現する。剣岳は針の山として描かれ、閻魔の庁のないのも特色である。絹本であるので岩絵具の彩色も濃い。」と記されている[30]。そうなると、高瀬重雄文化史論集１『立山信仰の歴史と文化』[31]に紹介されている「河内美術館本（下新川郡宇奈月町）　三幅・彩色」も立山黒部貫光株式会社本のことである。

新たに情報を得た、個人が所蔵する新出資料本には、他の立山曼荼羅にはなく、この立山黒部貫光株式会社本とのみ共通した図柄がいくつかある。そこで、両本を比較し、それぞれの制作背景について検討できたらとも思う。

（１）称名滝の「南無阿弥陀佛」

特徴的なのは、新出資料本の中央幅の中央に描かれる称名滝に「南無阿弥陀佛」と書かれていることである。

同様の文字は、現在確認している53点の立山曼荼羅の中では、唯一、立山黒部貫光株式会社本にのみ書かれている。立山黒部光株式会社本の場合は、左幅中央部に描かれた称名滝の流れにそったように黒い筆で「南無阿弥陀佛」と書き（写真28）、「佛」を特に強調している。それに対して、新出資料本では紫色の筆のような、マジックのようなもので明らかに書き足されている（写真29）。

称名滝の名称については、『今昔物語集』巻14には「其の地獄の原の谷に大る滝有り。高さ十余丈也。これを勝妙の滝と名付けたり。白き布を張るに似たり。」とあって、立山地獄の原の谷に高さ約30mになる大きな滝があり、その滝を「勝妙の滝」と名付けるというのである。さらに、『立山手引草』[32]にも、

> これが勝妙の瀧なり。本体は不動明王なり。ゆえに下の八聖王は不動の八大童子なり。この所にて、皆な人、御瀧を敬し奉るによって、また伏拝とも書くなり。それこの瀧を仰に、猶、高くしてその源を見えず。また見下すに、その瀧壺知る人なし。誠に銀河の九天より布を晒すとは、この御手洗の御瀧なり。また瀧の響き、滅浄妙理の調べあって、声門は十六行相を観ずるなり。瀧壺のかすかにして見え難きには、過去の無明を知りて、十二因縁を観ずるなり。七重の瀧壺は七々四十九院を一流に垂れて、下も万境に渡りて衆生を利益あるを見ては、十地の菩薩者は衆生無辺誓願度の万行を修して、本覚果満の源を観ず。碧々たる水は、即ち［梵字］字にして、大権現の内證二摩地なれば、法性寂然たり。ゆえに参詣の人々、この御瀧を敬礼するに、自ら諸悪莫作の心、発して心身ともに勝妙の楽を受て登る。

と紹介されており、やはり「勝妙の瀧」と記されている。

優れた滝という意味であった「勝妙」に「称名」という字に当てられるようになったのは、江戸時代後期ごろの、滝の音が「南無阿弥陀仏」の称名念仏の声のように聞こえるという伝説[33]によると考えられため、立山黒部貫光株式会社本、新出資料本ともに制作は江戸時代後期以降と考えられる。

（2）弘法に描かれる「十二仏」

先述した『立山曼荼羅集成』（第二期）の付録の解説に「弘法あたりに一列に十二軀の石仏がある」と記されている通り、立山黒部貫光株式会社本と新出資料本にのみ描かれている様子である（写真30・31）。ただし、新出資料本の場合は「十三仏」であり、これが書き間違いなのか、何か意図があるのかは不明である。

それにしても、立山で「十二」というと、「十二光仏」を思い浮かべる。佐伯幸長氏も『立山信仰の源流と変遷』で、

> この本（※『神道集』のこと）の中に『越中立山権現事』とあり、難解な漢文を以て縷々とした長文が登載されている。
>
> 『抑も越中の国の一の宮をは立山権現と申す。御本地は阿弥陀如来なり』から始まり、先づ十二所権現王子即ち十二光仏となして、一社より十二社まで本地仏の説明をし、夫々有難き功徳のあることを述べ、霊験忝きこと限りなしと賞嘆している。そして最終の文章には「此れらの如く十二所王子達の御霊験忝き事、称へ計るべからず。抑も此の権現と申すは大宝三年癸卯年三月十五日に教興上人といふ人御示現を蒙りて此の山に行き向い顕はし給へり」とある。教興とあるは慈興の誤りであることは申すまでもない。同書記載の他の諸神社に比し立山は最大の長文である。

と記し、『神道集』に記される十二所権現王子即ち十二光仏の名を摘記している。さらに、『立山大縁起』に記される十所王子と十二光仏を挙げ、「立山では十所の王子と十二所の弥陀示現の光仏が各霊所霊所に鎮祭され登山者に功徳霊験を以て参詣されていたのである」という[34]。『立山町史』別冊でも「地元に伝える『立山開山縁起』も、「立山之垂迹則弥陀之妙躰也」として、十二所権現を、「是れ則ち弥陀示現の十二光佛なり」と説き、山中十二の場所に、それぞれの仏を奉祭していることを述べている」[35]というのである。確かに、岩峅寺延命院所蔵の嘉永６年（1853）「立山縁起」にも、十所王子とともに「十二光佛　弥陀」として、

大汝ハ清浄光佛　　砂嶽炎王光佛
別山帝釋観喜光佛　　中津原智恵光佛

断材御坂不断光佛　　鷲岩室超日月光佛
五千原難思光佛　　箱折無称光佛
破山無量光佛　　熊雄無碍光佛
根雄無對光佛　　國見無邊光佛

と記されている。

そうすると、立山黒部貫光株式会社本や新出資料本において、本来は各霊所に描かれるべき仏の姿が、なぜか弘法の辺りにまとめて描かれたと考えることができる。

（3）玉殿窟や剱岳に描かれる仏の姿

新出資料本の中央幅には、立山開山縁起の場面として「玉殿窟」が描かれているが、さらにその上部にも仏の姿が描かれている。

立山黒部貫光株式会社本の場合、描き直されたために少しわかりにくいが、玉殿窟の上部に描かれるのは蓮華座に座り、右手を頬に当てているようで、左手に蓮の花を持つ姿から聖観音のようにも、如意輪観音のようにも見える（写真32）。新出資料本の仏の姿は、もう少し大きくはっきりと描かれており、蓮華座の上に立ち、両手で蓮の花を持ち、雲（紫雲）に乗っている姿である（写真33）。坐像と立像の違いがあるものの、雄山と大汝山の間から来迎した図とも思える。

同じように、左幅の剱岳の塔の上部に仏の姿が描かれている。この仏について、立山黒部貫光株式会社本の場合は、『立山町史』別冊に「佐伯家Ｂ本は、三重あるいは五重塔婆の中空に、座像如来像を描出している。」[36]とあり、『立山曼荼羅集成』（第二期）では「塔の九輪のさきに大日如来が出現する」と紹介されている。しかし、蓮華座に座って、頭の後方から放射光を放ち、足の上で定印を結ぶ阿弥陀如来のように見える（写真34）。それに対して、新出資料本は剱岳の塔をはっきりと描いているものの、蓮華座に座って、頭の後ろに円光が描かれていることがわかる程度である（写真35）。

剱岳の塔は、称念寺Ｂ本以外の、剱岳が描かれる立山曼荼羅と山絵図すべてに描かれており、「塔石有自然石也」（塔石有り、自然石なり）と説明されている。しかし、実際には剱岳にこういった塔はなく、剱岳の「象徴」として描かれたとみられている。その塔の九輪の先に描かれた、これらの仏の姿がどのような意味を持つのかは不明であるが、こちらも立山黒部貫光株式会社本と新出資料本にのみ見られる描写である。

（4）布橋灌頂会の描き方

芦峅寺集落で行われた「布橋灌頂会」を描く場合、その多くが向かって左側に閻魔堂を描き、中央の布橋を渡って右側の媼堂へと向かうように描かれている。しかし、立山黒部貫光株式会社本の場合は、向かって右側に閻魔王と浄玻璃の鏡、業の秤が描かれた閻魔堂があり、布橋を渡って左側の媼堂へと向かう構図となっている[37]（写真36）。新出資料本の構図も同様で、閻魔堂に閻魔王はいないが浄玻璃の鏡と業の秤が描かれている（写真37）。

両本と同じ構図で布橋灌頂会を描くのは、坪井家Ａ本（個人蔵）である。坪井家Ａ本は、軸裏の墨書から、芦峅寺の教順坊の所蔵であったが、元高野山の学侶の龍淵が譲り受け、画工の飛陽蘭江齋に指示して破損箇所を修復、補筆させ使用していたとわかるものである。そして、その際に布橋灌頂会の構図を変えており、当初閻魔堂と布橋灌頂会と切り離して描いていたが、閻魔堂の位置を描き直したとみられ、舞台の一つとしているのである。媼堂を左側に描く立山曼荼羅は他に、金蔵院本（金蔵院蔵）、来迎寺本（来迎寺蔵）、大仙坊Ｄ本（大仙坊蔵）、福江家本（個人蔵）がある[38]。このうち、金蔵院本と来迎寺本は布橋灌頂会から閻魔堂が切り離されており、坪井家Ａ本の描き直しは文政期頃（1818～1831）の布橋灌頂会の内容の改変が影響しているとみられている[39]。そのため、立山黒部貫光株式会社本も布橋灌頂会の構図から、立山曼荼羅制作時期において文政期頃のものと推定されているのである。

以上のように、立山黒部貫光株式会社本と新しく発見した個人蔵の立山曼荼羅（新出資料本）を比較してきたが、構図だけでなく、立山黒部貫光株式会社本にのみ描かれる細かい図柄も類似している。大きな違いは立山地獄の責め苦の種類の多さであり、新出資料本の称名滝に紫色の筆かマジックのようなもので「南無阿弥陀佛」と書き足されていることも考慮すると、本件資料は文政期頃に制作されたと推定される立山黒部貫光株式会社本を模写して制作された可能性が高い。ただし、色合いや絵のタッチは大きく違うため、描いた人物は別だと考えられる。

新出資料本の制作時期についてはさらなる検討が必要ではあるが、興味深いのは文政元年（1818）の岩峅寺との争論の中で芦峅寺から寺社奉行へ提出した請書[40]の中の「御絵」についての説明文である。

> 右、有頼之由来ヲ絵伝ニ仕、有頼一代并布施城主ゟ於立山不思儀奇瑞之事共を委細絵図ニ相認申物故、於立山之事共三幅之致絵伝ニ、往古ゟ他国江罷越致教化申故、自然と他国ゟ参詣之諸人も御座候。右之訳ニ御座候得者、別當岩峅寺ニ抱リ申義ハ無御座候。

とあり、芦峅寺の人々は「御絵　有頼之由来」というのは有頼の由来を絵伝にしたものだとし、この箇所について『越中立山古記録』第一巻の解説[41]にも「有頼一代、すなわち布施城から立山の奇瑞に至るまでの事跡を三幅の絵伝に仕立てたもので、昔から他国巡回の折、立山信仰の宣教に用い、他国参詣者の誘引に役立っていると解説している。いわゆる立山曼陀羅をさすもので、興味深い。」と記されている。つまり、文政元年の芦峅寺の人々にとって、有頼由来の絵伝（＝立山曼荼羅）は布施城から立山の奇瑞に至るまでの事跡を描いているものであり、三幅に仕立てたものであったのである。これに該当する立山曼荼羅は、現存する53点の立山曼荼羅の中では岩峅寺系統の専称寺本（三幅・当館蔵）も除くと、立山黒部貫光株式会社本しかない。しかし、本来は該当する立山曼荼羅が芦峅寺に複数あったと仮定すれば、そういった点でも、今回情報提供いただいた立山曼荼羅は貴重な作品だといえる。

おわりに

立山信仰を研究する上で重要な資料の一つである「立山曼荼羅」であるが、立山衆徒には「御絵伝」や「立山絵図」などと呼ばれていた。芦峅寺衆徒と岩峅寺衆徒がそれぞれに伝わる縁起を絵にし、描かれた立山信仰の精神世界を絵解きして唱導布教活動に使用していたのである。しかし、信徒が制作したものや山絵図を模写したものもあり、「立山曼荼羅」の定義やその制作目的などについて再検討しなくてはいけないように思える。

そのような中、剱岳から浄土山までの山容を背景にして描かれた掛軸の情報を得て、新たな「立山曼荼羅」２点を確認することができた。

１点は、岩峅寺系の山絵図の構図を基に制作されたもので、富山県が購入し、53点目の立山曼荼羅として立山博物館Ｈ本と名付けた。岩峅寺集落の立山寺や芦峅寺集落の中宮寺境内の堂舎に有名な神社の祭神を記し、仏の姿を描かないという点から考えると、明治期以降に制作された可能性も高いが、「立山三所禅定」と記し、江戸期の山絵図を基にしている点からは、江戸時代末期とも考えられる。しかも、同様に山絵図の構図を基に制作された、類似する立山曼荼羅と比較すると、他の立山曼荼羅には見られない図柄や描写、諸堂舎の名称などが多数あり、制作者の独特な信仰心が色濃く反映された作品である。そのため、制作の意図を測りかねる作品でもあり、さらなる検討が必要と言える。

もう１点は、個人が所蔵する三幅対の立山曼荼羅で、全体的構図も描かれる図柄も立山黒部貫光株式会社本と類似している。どちらも出自ははっきりとわからないが、新出資料本は立山黒部貫光株式会社本を基に描かれたと考えられる。さらに、文政元年（1818）に芦峅寺から寺社奉行へ提出された請書には、有頼由来の絵伝は三幅に仕立てたものとあることが記され、それに合致する立山黒部貫光株式会社本の布橋灌頂会を描く構図は立山曼荼羅成立において文政期頃と分類されるものであった。両本を比較していくことで、今

後も制作過程について探る手がかりになるのではないかと期待する。

また、本稿では紹介できなかったが、実はもう１点、新たに「立山曼荼羅」ではないかと考えられる掛軸の情報をいただいている[42]。個人がネットオークションで購入したもので、全体的な構図は大仙坊Ｂ本に類似する。こちらも出自がはっきりとせず、欠けている部分も多く、他の立山曼荼羅と比較すると課題の多い作品ではあるが、今後どのような意図で制作されたのかを考える必要はある。

それにしても、平成３年の開館から33年が経ち、単純に言えば、上記の３点を含めると「立山曼荼羅」とされる作品が34点から55点と増えたことになる。しかし、「立山曼荼羅」の定義の再検討も含め、今後も立山曼荼羅の調査・研究を進めていき、さらに立山曼荼羅研究が発展するよう、新たな立山曼荼羅の発見も継続して探っていきたいと思う。

［付記］

本稿で紹介した立山曼荼羅につきまして、加藤基樹氏、田村正彦氏、吉池義則氏より貴重な情報をいただきました。また、立山博物館Ｈ本の購入にあたり、当館元館長の米原寛先生と富山大学の鈴木景二先生よりご助言をいただきました。

ここに記して、皆様に御礼を申し上げます。

［註］

（１）昭和45年に国の重要民俗資料に指定された「立山信仰用具」は、芦峅寺集落の立山信仰関係用具及び山樵関係用具1,083点である。その後、立山博物館の調査・研究に進むなかで、岩峅寺旧宿坊家の延命院、多賀坊、中道坊から貴重な資料群の寄贈をうけた。これらの資料群の一部と芦峅寺の特色ある資料、合わせて160点が、令和２年３月に「立山信仰用具」へ追加指定された。これにより、吉祥坊本、称名庵本、専称寺本、善道坊本、大江寺本、立山博物館Ａ本、立山博物館Ｂ本、立山博物館Ｃ本、立山博物館Ｄ本、立山博物館Ｅ本、立山博物館Ｆ本［旧富山県立図書館本］の11点の立山曼荼羅が、国の重要有形民俗文化財となった。

（２）佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和48年９月15日刊）、311～312頁。

（３）註（２）に同じ。327～328頁。

（４）富山県［立山博物館］開館記念展「立山のこころとカタチ―立山曼荼羅の世界―」展示解説書（富山県［立山博物館］、平成３年11月１日刊）。同書には、当時、その所在が確認されていた立山曼荼羅は34点とあるが、来迎寺本、藤縄氏本、大徳寺本、高橋氏本（現：立山博物館Ａ本）、称念寺Ａ本、称念寺Ｂ本、玉林坊本、桃原寺本、県立図書館本（現：立山博物館Ｆ本）、大仙坊Ａ本、大仙坊Ｂ本、筒井氏本、志鷹氏本、泉蔵坊本、龍光寺本、相真坊Ａ本、相真坊Ｂ本、坪井龍童本（現：坪井家Ａ本）、坪井義昭本（現：坪井家Ｂ本）、称名庵本、佐伯宗義本（現：立山黒部貫光株式会社本）、佐伯省次本（現：佐伯家本）、多賀坊本、教山坊本（現：稲沢家本）、吉祥坊本、宝泉坊本、大江寺本、立山町本、善道坊本、伊藤氏本、坂木氏本、中道坊本、竹内氏本の33点が紹介されている。

（５）布橋灌頂会を描くものの、来迎寺本（富山市の見附来迎寺所蔵）や大徳寺本（魚津市の大徳寺所蔵）が「その他」に分類されるとする。両寺とも、佐伯有若、有頼を開基とする寺院であり、芦峅寺や岩峅寺の宿坊家とは異なる系統である。

（６）富山県［立山博物館］開館20周年記念特別企画展「綜覧　立山曼荼羅」展示解説書（富山県［立山博物館］、2011年６月18日刊）。

（７）富山県［立山博物館］開館30周年記念『新 綜覧 立山曼荼羅』（富山県［立山博物館］2022年３月31日刊）。

（８）『立山手引草』（岩峅寺延命院蔵）。嘉永７年（1854）に玄清が記したもので、立山曼荼羅の種本（台本）とも言われている。

（９）註（２）に同じ。202頁。さらに、佐伯幸長氏は同書（188頁）で、

> 立山禅定とは、胎蔵界立山に入峰錬行し、金剛界剱岳に感験精進し、峰に九品の浄土を讃嘆し、谷に一百三十六地獄の事相を懺悔し、自ら凡聖不二、神人一体、理智不二、即身即仏の仏慧を得て父母所生の身に大日如来の覚位を証得することである。

と述べる。

（10）廣瀬誠著『立山のいぶき―万葉集から近代登山事始めまで』（シー・エー・ピー、1992年11月刊、224頁）にも、「立山本峰・

浄土山・別山を立山三山といい、本格的な立山登山はまず浄土山に登り、立山御前峰に登り、別山まで縦走して大走りから下るという順序であった」と記されている。

(11) 飯野家本の構図は岩峅寺系の山絵図を原図としているものの、上部に芦峅寺の「立山略縁起」を記し、軸裏には「越中立山略縁起之圖 / 名刹 芦峅寺旧蔵」とある。また、立山博物館Ａ本（二幅・当館蔵）も岩峅系の山絵図の様相が強く表れているが、岩峅寺中道坊との関わりがあるため、ここには含めていない。

(12) 註（２）に同じ。372頁。

(13)「立山曼荼羅」については、加藤基樹氏が「『立山信仰用具』覚書－活用と課題－」（『研究紀要』第26号所収、富山県［立山博物館］、2020年３月刊）の中で、「立山博物館開館以来、「立山曼荼羅」の発見・報告が相次ぎ、「立山曼荼羅」研究はその成立背景や模写関係などが詳しく検証され、進展したが、この定義に従って、部分図であってもまた「立山曼荼羅」○○本と機械的に称し、それを１点と数えてきた。52点という立場は、この定義に順じて数えられたものである。しかし、「立山曼荼羅」はその機能から定義するなら、厳密に言うとその部分図などは、いわゆる「立山曼荼羅」としては区別されるべきである。少なくともまず、いわゆる「立山曼荼羅」と「立山曼荼羅残欠」を分け、そのほかに「立山絵図」と「立山縁起絵図」、そして「その他」として立山信仰個別唱導図に分類されるべきであろうと考えている」とし、立山曼荼羅の本質や歴史学的な背景を踏まえての議論が必要であると提唱している。こういった意見も踏まえて、今後、「立山曼荼羅」の定義についての再検討が必要だと考える。

(14) 立山博物館Ｈ本の購入にあたり、令和５年３月14日に収蔵資料評価委員会を開催し、収蔵資料選定委員と収蔵資料評価委員を招聘した。

(15) 当館の元学芸員・加藤基樹氏のご教示による。

(16) 註（２）に同じ。342～343頁。

(17) 像底部に「永和元年六月日　式部阿闍梨□□」の墨書がある木造媼尊坐像（富山県指定有形民俗文化財）は、芦峅寺閻魔堂蔵。開館以来、当館展示館の２階にて展示させていただいている。

(18) 文正元年（1466）「神保長誠寄進状」（芦峅寺一山会蔵）。「地蔵堂」「炎魔堂」とともに「祖母堂」が記されている。

(19) 当館蔵の山絵図「越中國立山禅定名所附圖別當岩峅寺」の中には、「ちんじゅ」（鎮守）、「有頼の堂」、「たいしゃく」（帝釈）を描くが、「姥堂」を省略したものもある。立山博物館Ｅ本にも「姥堂」は描かれておらず、省略した岩峅寺系の山絵図を参考にしたと考えられる。註（７）の69頁参照。

(20)『和漢三才図会』［下］（株式会社東京美術、昭和45年３月刊）。原資料は、正徳３年（1713）成立。寺島良安が江戸時代中期に編纂した図説百科事典である。

(21) 加藤基樹氏がネットオークションにて落札されていた本件資料を発見した際のプリント用紙より引用。

(22) 左幅は、本紙縦141.5cm×横67.3cm、外寸縦215.0cm×横82.8cm。中央幅は、本紙縦141.5cm×横67.3cm、外寸縦215.0cm×82.8cm。右幅は、本紙縦141.6cm×横67.3cm、外寸縦215.0cm×82.8cm。

(23) 青木純二『山の傳説』（日本アルプス篇）（丁未出版社、昭和５年７月17日刊）。『伝説とやま』（北日本放送株式会社、昭和46年４月刊）の㉕「ミクリガ池の竜」にも、

　ミクリガ池、ミドリガ池の両池には竜が住むといわれ、両池の間を通るとき、人々は念仏を唱えながら、おそるおそる通り抜けたという。

　ミクリガ池には風のない日でも、さざ波があるが、これは水底の竜の呼吸のためであるという。だから、ミクリガ池に石を投げこむと、竜が怒り山の天候がくずれるとして、固く戒めたものという。

　ミクリガ池はまた地獄の一つであって、八寒地獄であるという。

と紹介されている。

(24) 註（８）に同じ。みくりが池を「寒地獄」とし、以下のように案内している（下線は加筆）。

　これが「寒ノ地獄」なり。昔、越前の越智の良慶という僧、登山至し、この「寒ノ地獄」を見ていわく、「これは地獄に有らず。百姓は家々にかくのごときの種池を用意せり。その証拠を見すべしと言て、そのまま飛びこみ、向いの岸に游ぎつく、その時の大先達海弁法印思し召され候ば、「立山は三災の終りにも破滅すること無し」と。文殊菩薩の示諭にして、世々老宿言い伝い給えり。然るを、今、この海弁が先達に当って、この難を見ること、皆これ我が不徳のなす所なりと。心欲張り、身をもみ、この良慶が我慢を結界せずんば、永く当山の憂いなるべしと、一心に降魔の法を観じ、地主刀尾の威力を仰ぎ、手には降三世の印を結び、足には忿怒の蹄を踏しめ、良慶に向て申し給うは、今、持つ所の劔は汝が者に有らず。この玉殿の窟に秘はて納めて置き給うべし。大聖阿遮羅尊之御生剣にして、當山の重宝三種○誕生石〈岩戸扉、この剣〉一宝なり。その御剣の徳に依て、汝が堕獄の難を逃れたその剣を盗み取りし、詮議は後日の沙汰、

まず重宝をこの方へ渡し、今、一度地獄に入り、汝ガ游の信証を見すべしとあれば、良慶聞て、腸に据えかねえびらをたたえていわく。何にこの炭窯削り見るような物に、何の徳があるべし。「見よ見よ。我が行力を」と、御劔投げ置き、なずみもせず。また地獄に飛び入るに、「みいくり」泳ぎて、そのまま崖も見ず。生きながら、ついに地獄墜ちしなり。これ尤も慙撥、尤も大悪僧なりしゆえなり。聞くも恐ろしし「みついくりの池」と言うべきを、音便の法に依って、今は「みくりが池」と言う。これ略語なり。また御劔はこの時より秘め出ず。

(25) 伊藤曙覧『とやまの民俗芸能』（北日本新聞社出版部、1977年４月刊）。

(26) 左幅は、本紙縦143.4cm×横57.0cm、外寸縦191.0cm×横68.2cm。中央幅は、本紙縦143.5cm×横58.5cm、外寸縦191.3cm×横65.8cm。右幅は、本紙縦143.4cm×横57.0cm、外寸縦191.0cm×横68.2cm。

(27) 註（６）に同じ。18～19頁及び98頁参照。

(28)『立山町史』別冊（立山町、昭和59年２月15日刊）。同書の５頁には、「佐伯家Ｂ本（三幅対）　地鉄立山駅佐伯宗義記念室蔵」として紹介されている。

(29) 長島勝正『立山曼荼羅集成』（第二期）（文献出版、1985年刊）。付録の解説には、「佐伯記念館本　立山町千寿ケ原　佐伯宗義記念館蔵／三幅一舗　タテ一四六糎×ヨコ一七四糎　絹本彩色」とある。ただし、長島勝正『立山曼荼羅集成』（文献出版、1983 年刊）の付録の解説には、「河内家本（三幅対）　河内則一氏蔵　紙本彩色　宇奈月町河内美術館」と記されているので、1983 年から 1985 年の間に河内美術館から佐伯記念館（立山開発鉄道株式会社）が購入したとみられる。

(30) 註（29）に同じ。６頁。

(31) 高瀬重雄文化史論集１『立山信仰の歴史と文化』（株式会社名著出版、昭和56年３月３日刊）、140～142頁。

(32) 註（８）に同じ。

(33)『伝説とやま』（北日本放送株式会社、昭和46年４月刊）の⑭「仮安坂と伏拝み」には、

佐伯有頼が熊を追いかけていくと、はるかかなたから、何ともいえ微妙な滝の音がきこえてきた。おおぜいの人が称名念仏している声をきいているようなここちがして、有頼はけわしい坂をやすやすと登り越えた。登って見ると、目の前がにわかに開け、ずっと向こうに大きな滝の落ちているのが見えた。天から落ちてきたような滝のこうごうしさに、有頼は地にすわって滝を拝んだ。この滝を称名ガ滝といい、拝んだ場所を伏拝みという。滝音の聞こえた坂は仮安坂という。

別の伝えによると、法然上人が立山に登った時、滝の音が称名念仏の声になって聞こえたのだという。

とある。

(34) 註（２）に同じ。198～201頁。

(35) 註（28）に同じ。８頁。

(36) 註（28）に同じ。12頁。

(37) 多くの立山曼荼羅では、媼堂の前に柵で囲まれた影向石を描いており、それに似た「柵で囲まれた五輪塔」が右側の堂の前に描かれている。この五輪塔が何を示すのかわからないが、「影向石」のつもりならば向かって右にある閻魔堂を媼堂と混在して描いた可能性も考えられる。

(38) ただし、大仙坊Ｄ本と福江家本は立山曼荼羅の一部である。大仙坊Ｄ本は布橋灌頂会の布橋のたもとのみを掛軸にしたもので、福江家本は立山地獄の様子と布橋灌頂会の媼堂側が描かれた部分をそれぞれ掛軸に仕立て上げて現存している。

(39) 坪井家Ａ本については、福江充『立山信仰と布橋大灌頂法会－加賀藩芦峅寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅－』（桂書房、2006年９月15日刊）などを参照。

(40)『納経一巻等記録』（雄山神社中宮祈願殿蔵）。文政元年（1818）から文政２年（1819）の岩峅寺との争論などの書類をまとめたものである。翻刻は、廣瀬誠編『越中立山古記録』第一巻（立山開発鉄道株式会社、平成元年９月20日刊）の97頁～122頁参照。

(41) 廣瀬誠編『越中立山古記録』第一巻（立山開発鉄道株式会社、平成元年９月20日刊）、106頁。

(42) 個人蔵、四幅一対。向かって左幅から第一幅とすると、

［第一幅］本紙縦 155.0㎝×横 56.0㎝
［第二幅］本紙縦 153.0㎝×横 58.0㎝
［第三幅］本紙縦 120.0㎝×横 58.0㎝
［第四幅］本紙縦 153.5㎝×横 55.5㎝

である。ただし、第三幅と第四幅は特に欠損部分が多く、表装も傷みが著しい。

写真１　立山博物館Ｈ本（当館蔵）

写真２　「越中國立山三所禪定」

写真３　「玉殿岩家」の「連花岩」

写真４　「ちの池じごく」の描写

写真５　弥陀来迎図の描写

写真６　中嶋家本（個人蔵）

写真７　立山博物館Ｅ本（当館蔵、国指定重要有形民俗文化財）

写真８　越中国立山禅定名所附図（富山県立図書館蔵）

写真９　立山博物館Ｇ本（当館蔵）

写真10　「びじよう杉」下にある文言

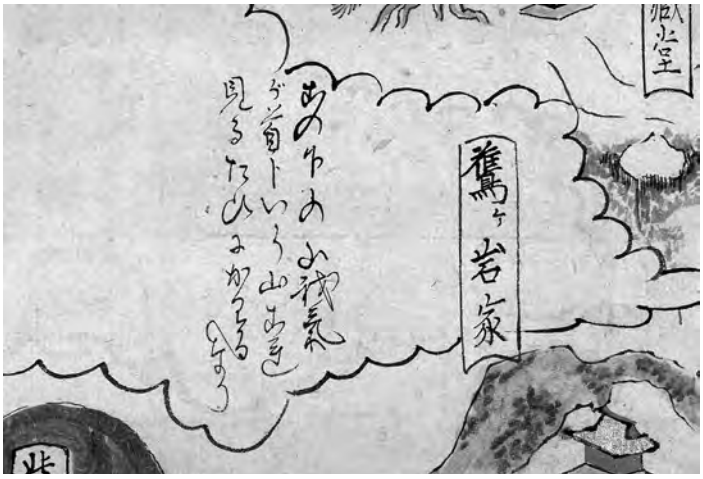

写真11　「鷹ヶ岩家」左横にある文言

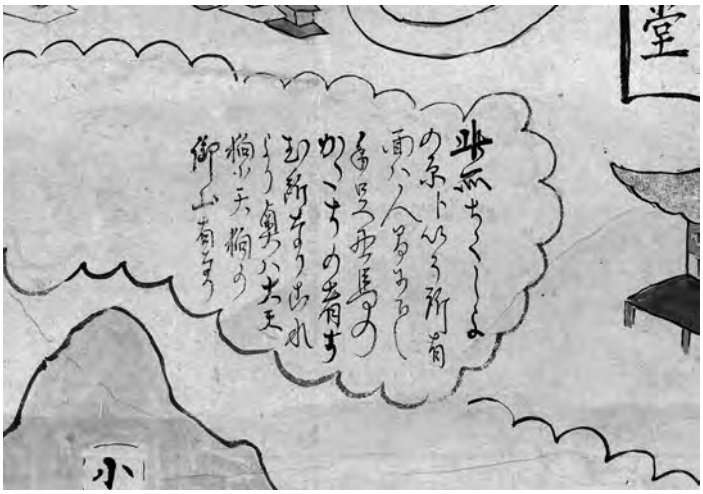

写真12　「中室堂」と「小天狗」の間の文言

写真13　「鏡石」右横にある文言

写真14　「びじよう杉」（美女杉）の描写

写真15　「十六善神御堂」と「中室堂」の描写

写真16　立山寺（岩峅寺）境内図

写真17　芦峅中宮寺境内図

写真18　新出資料本（個人蔵）

写真19　新出資料本の黒縄地獄

写真20　地獄に描かれる鞴（ふいご）

写真21　地獄に描かれる藍甕

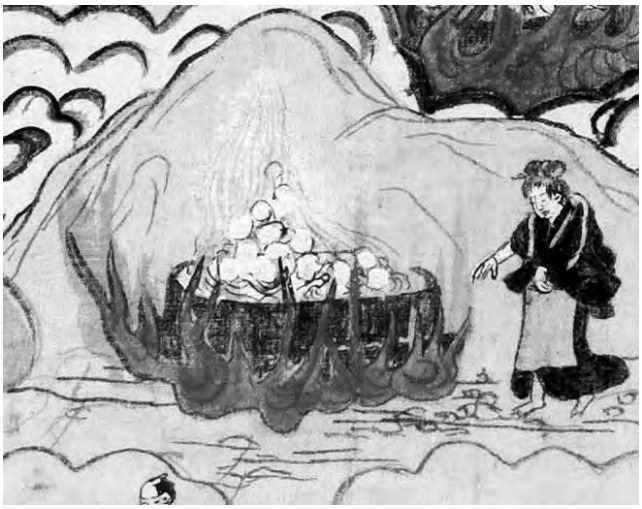

写真22　釜で何かを煮る地獄

写真23　みくりが池に描かれる伝説

写真24　桶で何かを洗う地獄

写真25　雷に打たれている男性

写真26　親鸞とみられる人物

写真27　立山黒部貫光株式会社本（立山黒部貫光株式会社蔵）

写真28　立山黒部貫光株式会社本の称名滝の
「南無阿弥陀佛」

写真29　新出資料本の称名滝の
「南無阿弥陀佛」

写真30　立山黒部貫光株式会社本の十二仏

写真31　新出資料本の十三仏

写真32　立山黒部貫光株式会社本の玉殿窟上部の仏

写真33　新出資料本の玉殿窟上部の仏

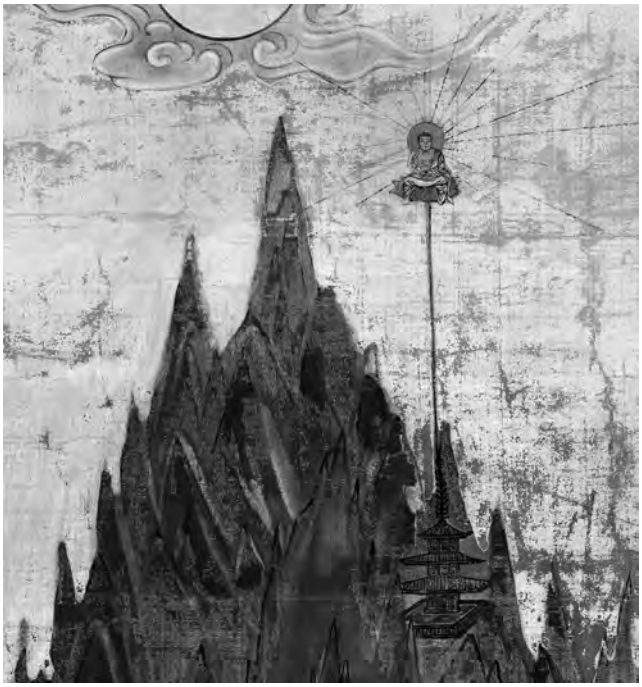

写真34　立山黒部貫光株式会社本の剱岳の塔の仏

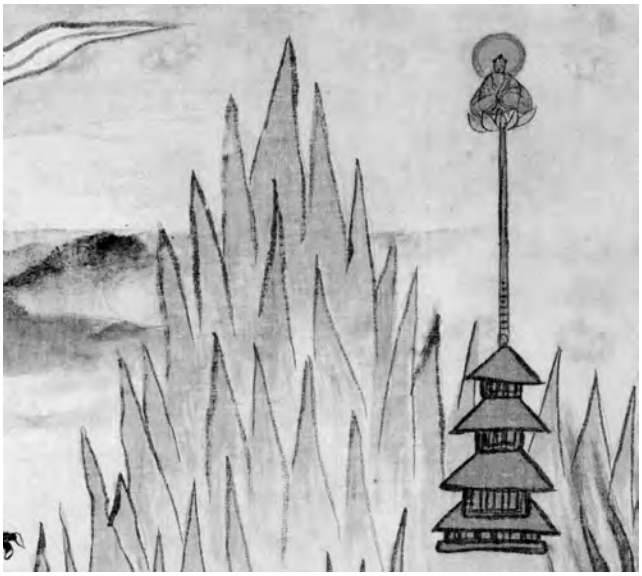

写真35　新出資料本の剱岳の塔の仏

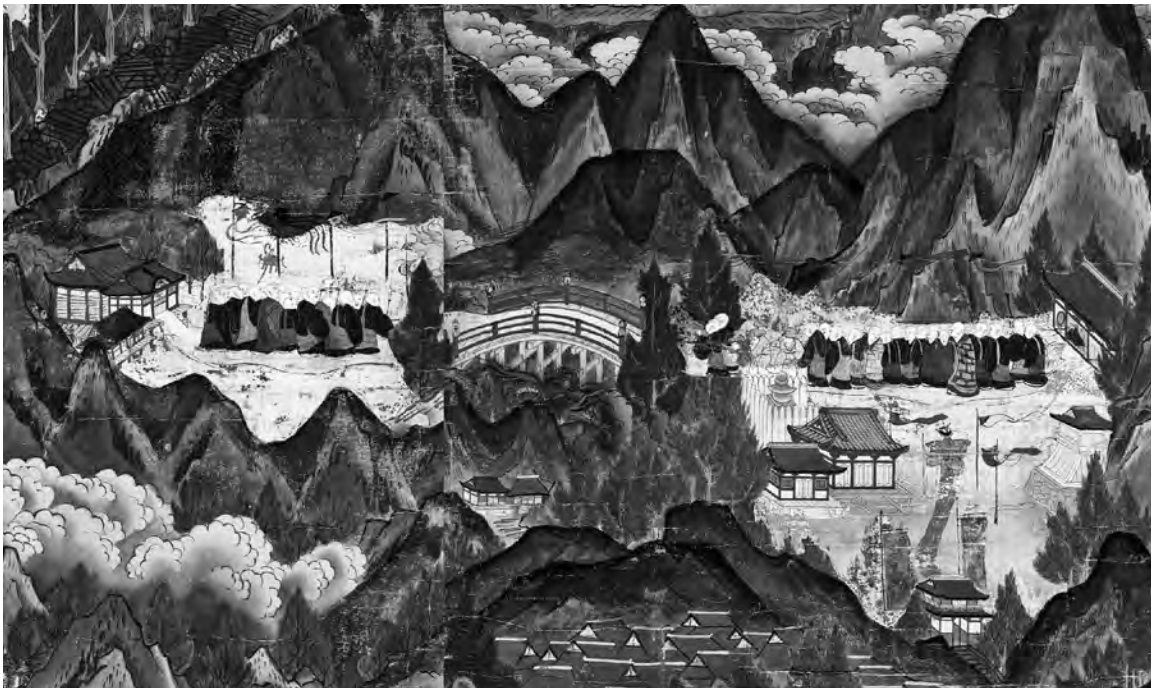

写真36　立山黒部貫光株式会社本の布橋灌頂会

写真37　新出資料本の布橋灌頂会